

第28回 日文研フォーラム

■
**言語学からみた「平家物語・巻一」
の成立過程**

Birth and Development of “The Tale of the Heike” (Book one)
from the Linguistic Point of View

■

カレル・フィアラ
Karel Fiala

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 梅原猛

● テーマ ●
言語学からみた「平家物語・巻一」
の成立過程

Birth and Development of "The Tale of the Heike" (Book one)
from the Linguistic Point of View

● 発表者 ●
カレル・フィアラ
Karel Fiala



発表者紹介

カレル・フィアラ

Karel Fiala

カレル大学日本学科長

1946年生まれ。1970年カレル大学卒業。
1981年カレル大学にて博士号取得。1970年－
1979年カレル大学講師。1979年－1981年チェコ
スロバキア科学アカデミー研究員。1981年－
1990年2月チェコスロバキア科学アカデミー東
洋研究所常任研究員。1990年2月カレル大学日
本学科長、現在に至る。1990年4月－1991年3
月国際日本文化研究センター客員助教授。

主な著書論文：

- A Bi-planic Approach to Japanese Semantics
(Description of the Post-predicative Modifier),
Studia Orientalia Pragensia VI (a monograph)
Charles University, Prague 1971-1972
- Poem Sequences in Manyōshū, vol.11-12 and
the role of poem 3061. Proceedings of the
intern. conference of Orientalists, Tokyo.
1978
- 海外における国語と国語の教育 13、チェコスロバキア。
国語年鑑。秀英出版、東京。1981
- Japan and China (a monograph on cultural
exchange) Oriental Institut., Prague 1981
- Japan and South-East Asia (a monograph on
cultural exchange) 東洋研究所、プラハ。1983
- チェコスロバキア国民の日本文化との接触
(初期文化観形成史ノート)。研究資料。東洋研究所、
プラハ。1985
- 日本語における再叙現象の指標。日本語学 5/1986。
明治書院、東京。1987
- Japonsko: cesta k Cesta k vzájemnosti
(日本研究資料)。1988
- Jak jsme poznávali japonsko Za (近代・近代
ボヘミアにおける日本文化の考察)。1988
- Materiály k japonské problematice (日本－
チェコスロバキア交流史の一章)。1988

本日は、『平家物語』の二つの章段を分析して、テキスト言語学的な立場から作品の成立問題について話したいと思います。

平家物語の成立過程を解くために、研究目的に応じて様々な方法が考えられます。従来明らかにされているように、『平家物語』の成立過程は文学史では非常にユニークで、複雑でした。文学史の教科書に書くなら、著者の氏名と作品の成立年間などが、不明であるとして纏めることは少しもおかしくない、的確な表現でしょう。それなのに、研究ではなぜこの問題を何よりも徹底的に追求しなければならいのでしょうか。それは、この問題にはもう一つ、文学史とは全く別の次元があるからです。

平家物語の成立問題の不透明さは、作品の極端な変容性とその無制限の解釈の広さに依拠しているようです。作品のこの変容性こそ、特定の時代を越えて、愛読されてきた作品の長い寿命のもととなっています。「平家物語」には、分かりやすい面と並んで、大変難しい所もあります。物語は何度も語り直され、書き直されていました。そのうち、編者はわかりやすい面の裏にあるわかりにくい面にひかれ、物語の内容を自分なりに理解し、作品の解釈を深めよう、あるいは見直そうとしていたのです。

各々の異本、例えば『源平盛衰記』あるいは闘諍録・長門本・南都本など、皆それぞれの出来事にそれぞれの解説を加えています。挿入は逆に作品の元の内的整合性を損ない、作品を難解にしている所もあります。

複雑に変化してきた箇所は、成立当時の著者と受容者との直接の関係で形成されましたので、物語の本来の構想に戻らないかぎり、自然に解明できないと思います。そのため、まず従来の、作品の成立に関する諸説を簡単にまとめてみます。

一つ目に、百十数種類にも上る現存の写本や刊行本のうち、鎌倉期に成立したと確実に主張できるものは、一冊もありません。例えば屋代本の現存最古の写本は随分古いものと見られますが、成立の記録はありません。しかも屋代本は当道系の語り本のようなもので、当道系の異本は皆流動期より新しく、固定期になつてから成立したと思われるから、この屋代本も長い生成、流動などの成立段階を経て変遷してきた語り本です。

また現存の応永書写の延慶本は、水原氏の研究からも明らかであるように、屋代本などより古態的な文章を残しています。ところが、奥書きの中で現在最古の明確な成立記録を付せられた、応永書写の祖本までも、延慶年間以前には明らか

に遡るとはいえませんが。また渥美かをる氏がかつて平家の原態と思い、山下宏昭氏が随分古態的な文章を保存していると見なされた四部合戦状本と源平闘諍録本があります。しかし、四部合戦状の現存写本も、佐伯真一氏が指摘されたように、十五世紀成立で、非常に新しいものです。

つまり、鎌倉期の本は確実に残っているとは限りませんので、異本そのものの古さは奥書あるいは、成立についての記録などからだけでは、文章の古態性は判定できません。

二つ目の点。現存の各異本の文章には重層構造の箇所が沢山あって、複数の伝承が合流したと思われます。個々の異なった伝承に依拠している層が重なってき、全面的な、あるいは部分的な繰り返しが見られます。この意味では、現存する全ての異本の文章は、先学がかつて求めていた原態『平家物語』を幻の概念に変えてしまったことが明らかになってきました。しかし、原態よりはるかにゆとりのある、はるかに自由な概念も有ります。——いわゆる相対的古態性です。原態の究明に対する諦めに次いで、古態の究明も諦めようとする傾向が強まっています。最近、諸本の形式上の分類への逆戻りも見られます。それで、従来行われた分類を纏めてみましょう。

諸本はまず、略本と広本（旧名増補本）へ大きく分けることができます。渥美かをる氏の主張によると、原態は四部合戦状、あるいは源平闘諍録のような略式文章のある記伝体的異本の中で探るべきでしょうが、水原氏はこの定説の成立順をひっくり返し、かえって延慶本系統の異本がいわゆる「当事者」による事件叙述に、説話、記録、噂を不整合な形でゆるく結合させているから、未編成の原態に近いということを考えておられます。

また山下氏は、四部本の編年性と延慶本の重層性に注目し、四部本の真字体表記に先立って、古態的仮名本が存在したことを想像しています。氏は水原説に疑問をかけ、四部本には、少なくとも部分的には、古態的なところがあると述べておられます。

考えると、略本と広本への分類法だけでは、古態性の問題は決して解明できません。『平家物語』の成立過程に、作品が何度も略され、また何度も新しい要素を挿入されましたので、現存の四部本も、延慶本も、両類の要素を兼ねています。

他の分類法では、諸本を当道系と非当道系へ分けます。山下氏は当道系語り本の系統を詳細に吟味した結果、当道系の変動を、屋代本から八坂・一方両流を含

め、竹白園本・平松家本・鎌倉本・百二十句本を経て、覚一本に到る過程として精密に捉えられたのです。一転だけにご注目いただきたいと思います。屋代本に先行していたと思われる語り本を、ただ現存していないという理由で、当道系から完全に外すことができません。当道系の概念と語り本の概念との間にはかなりの重なりがあるようです。

また非当道系の異本の中でも、語りの的な要素を有するものが確かにあります。源平闘諍録の巻八で、平家の曲節を示す用語が書きこまれた箇所がありますが、山下氏は、四部本の中でも、唱道的な箇所を指摘されます。

それに対し、富倉氏の『平家物語』二元成立説によると、延慶本のような読み本は独自の成立系統に所属し、語り体を先行形態としていない、という説を提出しておられます。しかし、延慶本でも、唱道的性質の章段があって、その代表的なものとは作品全体を統合させる、諸本共通の序章「祇園精舎」です。序章は流動性が極めて低く、全ての本では「語り」的であります。

序章は「平家物語」の諸本を『平家物語』らしくするものとして働き、その成立時点では、『平家物語』という名にふさわしい作品生成期の成立過程は一度達成にいったと考えるのです。

序章と同じく殆ど變動しない箇所が、ほかに『平家物語』の諸本を通して見いだされます。これらの箇所は皆達成度の高い、諸本共通の唱道的な文体層に所属しているものと見たいと思います。

現存の諸本では、古態性を求めることにも限度があるようです。なぜなら、高橋貞一氏が早くから指摘されたように、現存の本は皆、例外なく、かなり進化した生成段階から生まれたもので、一定の種類のみの『平家物語』にすぎないということは、充分考えられる訳です。つまり、これらの本は皆互いに違いながら、ある意味ではまたみな非常に似ています。

かつて、現存の全本とは異質の「平家物語」も存在したようです。例えば、一定の箇所が現存の諸本のうち一定の本（拙論では例えば四部合戦状本）の中では一番古態的であると判断しても、重層性が窺われますので、やはり二つか三つの伝承が合流して成立したことになります。

このような状況では、唯一の方法が、内的復元と、その結果を独立に裏付ける学際的な検証でしょう。

内的復元になると、三つの可能性があります。一つは文学構想上の考察で、もう一つは、流動する箇所を本文批判法で吟味することです。例えば山下氏は先の

二つの方法を広く応用されます。三つめはテキスト言語学的分析であって、まだ応用されていないようです。私の試みは断片的で、初心的ではありますが、簡単に説明させて頂きます。

現存諸本の各系統については、先ず、四部合戦状のこと。現存の四部本の中では大変古態的な層が残っています。私はこの層を仮に、「四部1」と名づけました。それとは別に、「四部1」にかなり「四部2」類の本が存在したことを、他の異本系統との比較から推定したいと思います。現存の「四部1」は非常に略本的な性質の本です。しかし、他の系統と共通箇所を含めていたと思われる「四部2」はより拡本的な性質のものであったようです。

元の四部本は、今のような真字本ではなく、仮名本だったといわれています。私は、「四部1」と「四部2」双方の原態がこのような仮名本だったと思います。現存の四部本の祖本は「四部1」系統で、現存しない「四部2」の系統は直接には現存しませんが、源平闘諍録にも、源平盛衰記にも影響を与えたようです。両方の中では、この影響の形跡が残っています。また延慶本の系統、特に「旧延慶本」あるいは「旧長門本」として知られる、延慶本と長門本との共通の祖本にも、「四部2」系統は影響を与えたのです。「旧延慶本」をここで仮に「延慶1」と

名付けます。その系統の本は現存していませんが、系統が存在したことは定説でも認められています。

屋代本から覚一本までの過程についてはもうお話し致しました。変動性が小さく、当道系枠内の発達としてすでに分析されているもので、ここでは割愛致します。

特殊な興味深い本として、南都本を揚げたいと思います。南都本は屋代本と何らかの關係を持ちながらも、四部、延慶両系統とも何らかの關係を伺わせませす。私は、南都本を分析した結果、この本が当道系にきわめて近く、屋代本の祖本の様なものを参考したように考えます。つまり、所謂読み本と当道系性格の語り本と、両方の伝承を踏まえたものであると思います。

次に、大變雑多な作品　―『源平盛衰記』―に触れたいと思います。多数の異本の要素を吸収し、取り入れていますので、分析できないほど複雑である、との評価があります。しかし、最近水原氏はその活字本を編纂し、この、やはり、「平家物語」の一異本と認めるべき作品が深く研究されるようになりました。特に注目に値するのは、盛衰記の中では複数の段階の文章形態が平行して保存されている点です。そのため、この本は「平家物語」成立問題の關係では非常に貴重

な資料です。例えば「四部本2」の文章のあり方を、私はまだ盛衰記を入手していない時点では推定してみたのですが、その推定の文章は「盛衰記」の中では残っています。

次に、成立の方向性について（スライド・図1を指す）。この図の中で、二つの系統の間に共通点があって、他の系統と共通点のない関係を連結線で示しました。「延慶1」と「長門本」だけが似ていて、他の本が違ふところがそうです。しかし、この点を見ると、異本系統の間に密接な関係だけが表示されていて、成立の方向性は図からは読み取れません。例えば、略本系統「四部1」がより根本的な系統「四部2」に先だっていたか、つまり生成過程中に省略への傾向より増補への傾向が優等であったかについて疑問が残っていますが、私見では、ここはおそらく増補でしょう。いずれにしろ、図の中ではこの箇所については、方向性を示す矢印を使わないことに致しました。

一方、「延慶1」系統の中では「四部2」系統と「闘諍録」系統とが合流し、方向性ははっきりしていますので、図の中では成立順を示す矢印をつけました。

この考察はもちろん、具体的な写本についてではなく、『平家物語』の文章の生成過程の様々な段階についてです。つまり、具体的な異本は保存されなくても、

物語の文章が生成されていた各々の段階を区別して、それらの段階は、他の系統の一部の異本では、部分的に保存されているということを指摘することが出来ると思います。

方法については、私は「言語学から見た」という見出しを使ったのですが、より正確には、「テキスト言語学」にするべきでした。図では、覚一本章段「殿上闇討」の冒頭部分、特に（旧）「三十三間堂」建立の説話を分析し、また、章段「殿上の闇討」内容の分析を紹介しています。色々とエピソードがありますが、それぞれのエピソードに記号をつけて、順序を調べてみました。

テキスト言語学的な面は先ず機能分析法の応用に依拠しています。すなわち、文章の分析を機能言語学的方法で進めて、エピソード連鎖の背景を明らかにするために、複数の部類を言語的機能に基づいて分類してみました（図2を指す）。Aとは、事件叙述の部類で、その中では、何が起こっていたかということを、つまり事件だけの叙述を、まとめました。Bとは、発話行為の部類で、換言すれば、引用文などの部類で、つまり誰が何を言ったということを包括しているのです。次に、評価の部類ですが、著者あるいは主人公が評価を表しているところをC部類にまとめました。勿論、重なりもあります。一度A部類に含まれる内容は、B

部類に含まれる内容と部分的に「重なることがあって、Cとかさなることもあり
ます。これらは皆、同じ断片の同じ箇所が複数の機能を託されているケースで、
重なりを図の中で表示してみました。D部類は、事件の背景に関する説明ですが、
発話行為では、エピソードの自然な時間的連鎖から遠く離れた事件叙述を背景の
説明として受けとめます。時間的に「ずらして」述べられる事件の表示の前に記
号「d:」を付けておきます。

A部類所属の事件は、大体直線的に、記伝的に並んでいます。ところが、エピソードの中では、Ab1とAb2の例からでもわかるように、順列する事件の外に、
事件が並列する事もあります。時間的に並列したエピソードを、Ab1・Ab2とい
うような順序、あるいはAb2・Ab1のような順序で並べることができますので、
諸本間でも、並列事件を述べる時の順序は流動的です。

実際、Ab1・Ab2は同時に起こった事件でしょう。つまり、忠盛は得寿院を造
請しましたので、勸賞に但馬の国をもらったことと、同じ理由で昇殿を許された
こと、という二つの事実は、例えば全く同時ではなくても、先後を問わずという
ことになります。並列エピソードの典型的な例です。

発話行為部類は、実際の事件を叙述する部類よりはるかに変動性が高いようで

す。物語の、史実離れへの文学的改作が進み続けても、事件の内容、事件の順列などがかなり固定的です。一方、史実から早く離れていくのはB部類で、つまり、誰が何を言ったかという形で、著者あるいは改作者が自分の意見と、自分の、主人公の心理的背景についての考え方を主人公の口にいれている訳です。急速に変動する発話行為部類の分析によって、作者、改作者などの作意を読み取ることができます。

Cは、事件の内容に対する評価をまとめた部類です。ここでは、著者による直接の評価表現は少なく、むしろ主人公の口による評価となっています。誰が何かを言った、例えば重盛が言ったか、清盛が言ったかという叙述の内容には虚構の分が大きく、著者が自分で言おうとしていること、あるいは重盛と清盛の性格を作品の構造に合わせる為に言わせていることの内容は、改作過程中に成長していきません。

次に、因果関係部類Dについて一言。この部類のデータは異本間に極端に変動します。何が何のために起こったのかということについての考え方は、改作者によって完全に違います。

諸本を比べると、複雑な表が得られます。背景を解明するのに有用な異本とし

て、盛衰記を挙げることができます。盛衰記の文章に仮に数字を当てて、諸本との比較を試みました。

盛衰記の文章にはセグメント3、4、5、6があり、長門本と南都本には3、4、5、延慶本には3、5があつて、当道系の諸本には3だけがあります。セグメント6、貧僧による得寿院の供養は盛衰記だけにあり、その内容は盛衰記独自の虚構です。このセグメントが後から挿入されたことは、文章の不整合性からも窺い知れます。セグメント6に続く文章の中の指示代名詞は、セグメント2を直接に受け止め、2と6は挿入される前の状態を残しています。

セグメント3、5は延慶本独自の挿入で、得寿院供養の説明です。セグメント6——この供養を貧僧が行ったことの叙述——は、作品の本筋から遠く離れています。長門本（そして、その文章を伝承する南都本）はさらにセグメント4を挿入しましたし、盛衰記は様々な異本の系統を「拾」った形で受けとめ、3、4、5、6になおしたのでしょうか。

結果的には、挿入過程にも個々の段階があつて、四部本と源平闘諍録では、0段階（挿入以前の段階）に次いで、1、2、3段階を区別することができます。

また、忠盛自身あるいは朗等家貞が、闇討の計略を察知したという経緯があり

ます。家貞が噂を先に聞いたという文章の姿勢は、現存諸本の内、源平闘諍録にいたって初めて現れたのです。四部本の中ではこの箇所がありません。盛衰記・延慶本などでは、家貞が聞いたのではなく、聞いたのは忠盛であったという筋になっていますが、これも長い変遷を経て得られた、随分新しい生成段階でしょう。0段階から、1段階、2段階への転換をたどると、この分析に説得力があつて、個々の段階はスムーズに復元できます。

次に、セグメント ∞ （刀の詳しい説明）について。このセグメントは盛衰記だけに収載されました。セグメント ∞ と ∞ との結合について。「殿上闇討」の中に、五節舞の席で「薄様」の囃子の経緯です。“はやされける”というところでは、忠盛が舞をしています。殿上人は歌詞を変えて、「伊勢瓶子はすめなりけり」と囃します。薄様についての詩句は、忠盛が舞をしている場面導入の前後の近辺にあります。しかし、当道系では先方に持ってこられるのは、季仲を中心とした、昔の五節舞の話題です。薄様のいきさつは、昔の五節の紹介に使われますが、当道系はこれで恐らく文章構成のバランスを図っていたのででしょう。そのため、五節の場面では、五節の歴史を説明しています。また五節の歴史を説明しているきっかけに、「薄様」の囃子にも触れ、季仲の沙汰を載せていたよう

です。これによって、元々互いに遠く離れていたセグメント「 \sim 」と ∞ は結合されました。原形はおそらく四部本と盛衰記に保存されていた状態で、季仲のことは段階1の解説として、後から追加されたようです。しかし、源平闘争録以降の本では、この話は先の方にもってこられ、五節舞の説明として生かされました。当道系はこの源平闘争録の構造から示唆を受けたものであるといえます。

次に、入れ替えのこと。初期、家貞が用意をいたしたことの叙述は、忠盛が準備をしたという経緯に先だっていたようです。当道系が忠盛の話を先に出したことによって、独自の結果を得たわけです。

今、皆様にお配りした「殿下乗合」の文章をご覧ください。ここでは、被検文章をセンテンスに分けてから、センテンスよりさらに短い、語り直しの変異の単位——センテンス内セグメントと呼んでおります——へ分解しました。図の2ページでは、事件叙述の部類、発話行為の部類、評価の部類、解説の部類への分解を載せております。

次に、3ページをご覧ください。私は先ず、伝達機能による単位、つまり、事件叙述の部類、発話行為の部類などのような、大きな部類への分解を進め、また、それぞれの部類の中では順序変異の最小単位を求めました。次に、センテンス配

列、センテンスより小さいセグメントの配列、これらのセグメントの内、センテンスにいちばん近く、構文的完結性の高いもの——私が最短文と呼んでいるものの配列を検証し、諸本間の比較対照を試みました。「最短文 (minimal text sentence)」とは、「節 (clause)」に近い概念ですが、全ての節は最短文であるとはかぎりません。この研究では「最短文」を独自の単位分かち法で抽出し、諸本の最短文配列を対照させながら、究明してみました。

付録2の3ページでは、章段「殿下乗合」の一部を複製いたしました。この付録から、文章変換の過程が読み取れます。箇所19と20とが段々前の方に移っていることはよく分かります。これらの箇所を含むセンテンスをご覧下さい。

「小松殿の次男、新三位中将資盛卿、その時は未だ越前守とて、十三になられるが、雪ははだれに降つたりけり。枯れ野の景色、誠に面白かりければ、若き侍ども三十騎ばかり召具して、蓮臺野・紫野に打ち出でて、鷹どもあまたすゑさせ。」等ですが、セグメント19と20は、成立過程では、文章の始めの方向に向かつて徐々に移動しているようです。これは恐らく、不自然な位置に挿入された成分がその自然な位置へ向かつて移動している (lowering) 過程でしょう。また、変換文法の規則で言えば、上昇変換 (raising) と低下変換 (lowering) の概念

をもって表せる、一種の通時的変換 (diachronic syntactic transformation) と見ることが出来るかも知れません。

「殿下乗合」文章の生成と成長については、次の4ページを御覧下さい。セグメント配列の比較対照はご覧の通りです。4ページで示される文章例の生成過程を、段階1、2、3、 $\omega \cdot 1$ 、 $\omega \cdot 2$ に分けました。段階1は四部合戦状本の中で保存されてきた状況を示しています。段階1から段階2を得るために、セグメント ω を左の方へ移動しましたが、これによって主語 $\omega \omega$ は元の位置から離れてきて、その反復は必要となりました。また、この移動と平行して、新しいセグメント $\omega \omega$ も挿入されました。段階3では、セグメント $\omega \omega$ も左へ移動します。よく見ると、段階3は明らかに段階1と段階2の合流で出来たのです。

長門本、あるいは長門本成立後の延慶本系統の異本は、四部本と源平闘諍録本の文章より新しい層の文章を含んでいます。ただ、段階1の四部本の中では「暗きほど」という箇所があり、段階2の源平闘諍録ではこのあたりは「しかる間に」となっています。しかし、他の異本と比較して見ると、この差異はおそらく誤写でしょう。「暗(闇)間」を「然間」と読み間違えたせいで、この箇所の整合性を破る表現「しかる間に」が出来たのではないかと私は思います。次に、段階

3に進みますと、「夜にてありきければ、殿下の御出とも知らず」となります。つまり、全く同じことを繰り返さないために、一回は「暗かったから」、一回は「夜だったから」と言って、また一回は「資盛以下の武士は殿下基房の御出だということを知らなかった」、一回は「殿下以下の奉行は入道相国の孫資盛だということを知らなかった」というふうに、文章の内容は少し変わります。しかし、これはただ、反復をさせるために意味をずらしたことでしょう。

次に、長門本の「これによりて」（「依之」など）、これは「しかる間に」という展開型（がた）接続表現の一換言にすぎないと思いますが、この接続語はここでは文脈外れです。この所にはやはり「暗い程に」「暗き間に」などのような古態だけがびったり合うのですが、延慶本では、先に述べたように、異なった性質の伝承が合流したのです。

いままでの内容をまとめてみますと、テキスト言語学的な分析法を応用し、言語機能によって文章の内容を部類に分解してから、それぞれの部類の内容やそのパラフレーズによる変遷を調べてみました。また、異本の各系統を対照的に比較してみても、比較の中ではセンテンスの配列と、センテンスの中では、節に近い“最短文”の配列、またその他の、「文節」に近いセグメントの配列を吟味しま

した。

以上、成立過程について考察して参りましたが、次に、章段「殿下乗合」の内容が具体的にどのようなように変わってきたかという仮説を立ててみたいと思います。

付録1をご覧ください。センテンス内セグメントに通し番号をつけて、章段の全文を1枚にまとめて見ました。

巻一の章段間の時間的配列、構想展開などの観点から見れば、章段「殿下乗合」は明らかに「我身榮華」の中で述べられる清盛出家に続き、その内容を時間的配列で受けとめています。また一方、物語の続きを考えますと、この章段は「鹿谷」の反乱を正当化し、「平家悪行の始め」を設定するものとして、章段「鹿谷」に直接に繋がるのです。

ここまでの『平家物語』の部分は、平家とは直接関係する話題のほか、いわゆる「大政治圏」――つまり山門関係の主題――と、いわゆる「小政治圏」――つまり院と天皇との関係の主題――を展開しています。章段「殿下乗合」の諸本共通の冒頭部分の働きは、物語を「小政治圏（後白河院と高倉天皇の関係）」から平家のテーマに戻すことにあります。

物語の紀伝体的資料の中では、当然いろいろな歴史的事件が混ざりこんでいますが、「我身榮華」から「殿下乗合」を経て「鹿谷」に続く主題は、平家に直接関係する本筋です。物語の序章を除くと、「殿下乗合」以前の章段には、平家の悪口を言っているところは少なく、平家のめでたさを強調するものです。この文章はおそらく、平家が繁盛した頃の資料を使ったものでしょう。しかし、「殿下乗合」とそれ以降の章段は、平家の批判に満ちています。

確かに、忠盛先祖のところから、「殿下乗合」の始めまでの文章の中でも、たとえば「禿童」と「ギ王」は平家について批判的ですが、これらは皆後から挿入されたからだと見るべきでしょう。

「兵範記」を参考した原『平家物語』の三巻説の根拠はまだ不十分ですが、さきに触れた文体層の内容はやはり、古代文献からその存在が窺える「治承物語」という題名にふさわしいものではないでしょうか。延慶本十二巻のうち、上の六巻は大体「治承物語」と呼べるような内容で、下の六巻はむしろ「合戦状」を基にした軍記物語です。両部を結合させたのは序章——「祇園精舎」——と、「殿下乗合」の冒頭部分のように、序章と同じ語り物的な性格をもった統合文体層ではないかと考えます。

序章は、御存知の通り、無常感を唱える、かぎりなく美しく、琵琶の語りに何よりも適した章段です。しかし、これに注意深く読みますと、作者は、生きる者――すなわちジョウシャ（生者）――は必ず滅びるという、涅槃経の発想から離れて、それを、栄える者――すなわちショウジャ――は必ず弱まってきて、権力を失うという、朝家に対しては挑戦的な権力者への警告に変えてしまいました。すぐ後にこれが全部、清盛に対する偏った、残酷な批判のために利用されるのです。

この意味では序章は、『平家物語』の中に統合されている様々な話の内容をずいぶん一方的な、単純な視角から解釈しています。ともかく、このような序章は、『平家物語』を決して、戦死者に対する鎮魂物語として興しているとはいえません。

また、合戦関係で指摘される『平家物語』独特の、人生肯定観を前提としたリアリズム――例えば有名な馬「生食（イケズキ）」の説話が実感させる雰囲気――これも序章にはありません。『平家物語』の文章ではかなり新しい層となっている法然教も、序章の中では見いだされません。実は、末法思想は、仏法・王法が共に滅びるという考え方でしょうが、この序章はいかにも仏教的でありながら、

その焦点は、公家思想の重要なテーマ——「王法」——にあるのです。

「沙羅双樹の花の色」のこと、「祇園精舎」は、平安末期の作品では珍しくありませんが、「沙羅双樹の花の色」を盛者の必衰に例えるのは、違和感を誘う解釈です。作者は僧であるよりも、いわばプロの「琵琶法師」であり、低い身分の公家出身であったかも知れません。少なくとも、「徒然草」が「平家物語」作者として掲げている前司行長という人物がこの序を作ったとは考えにくいと思います。行長の父行高は清盛の恩人で、行長は清盛を単なる悪人として扱えたはずはありません。語り物的な統合文体層は明らかに、清盛を悪視した単純な民衆的な伝承を踏まえています。

作品を繰り返して読み続けますと、語物の性格をもった、共通の箇所は殆ど全本には多くあります。これらの箇所は独自の文体層をなしており、作品の様々なテーマを結合させるのです。ですから、何か記録的な、記伝的な作品が先に存在したのか、それとも異質の資料が同時にまとめられたのか分かりませんが、先に述べましたように、私達が現在『平家物語』と呼んでいる作品を「平家物語」として完成させたのは、語物の文体層にはかならないと思います。この文体層は序章を始めとして、それぞれの章段の中に割り込み、序章と共通の視点を持ち込ん

でいるのです。

セグメント①②の中の、「これこそ平家の悪行の始なれ」、あるいは、より古い形では、「これぞ平家悪行の始とぞ聞こえし」、という表現は後期挿入であると言われていますが、これも序章の文体層に所属しているのではないかと考えます。

次に、章段「殿下乗合」の事件部類の構成について。まず一院の出家。屋代本以外の当道系はこれを「嘉応元年七月十六日」（屋代本は二十日）にしていますが、史実では、「嘉応元年六月十七日」でした。語りでは、このような間違いが起こりやすいようです。これも語り系の古さを裏付けており、故意の改作ではないと思います。例えば、清盛が二月十一日に出家したにも関わらず、十一月十一日に出家したと書かれたのは、数字「十一」の再選択（反復）の結果で、一種の心理的現象から起こったミスでしょう。

後醍醐天皇の即位関係の儀式は「東宮立」の中では紹介されていますが、その際、「平家物語」があげる日付は全く別の事件の日付です。これは、ある一定のエピソードが脱落された時点では、そのエピソードの日付が違ったエピソードに当てられたことの例と見るべきでしょう。屋代本は逆に類似した数字を対照させ

るため、「十七」をさらに「二十」に変えたのでしよう。

次に、一院はご出家なさったとなっていますが、一院の出家については、当道系の本だけにあり、延慶本の中では、挿入の跡がはっきりしています。また、盛衰記では院の御出家を、熊野権現説話との関係で述べています。この点から判断しますと、元の「平家物語」には無かった筋と見るべきではありませんか。

しかし、別つの可能性もあります。セグメント「」をよくご覧下さい。

これによると、乗合の事件は「去んじ嘉応二年十月十六日」に起こったように設定されましたが、史実は七月三日です。章段「殿下乗合」の作者が「玉葉」の文章を参考したかどうかについて、諸説があります。この文章を分析すると、七月十六日の事件の叙述から、「平家物語」は語彙を数多く採用しているということが判断できます。七月十六日となっているのは、乗合事件の時間的設定が院出家の設定との相互影響の関係で成立し、また、「乗合事件」の叙述に「玉葉」の十月十六日づけの記録が使用されたからでしょう。つまり、事件叙述の間に早くから相関性があり、当道系以外の多くの異本では院出家の沙汰が載っていないという事は、日付の重なりのため早くから脱落された、そして当道系では逆に、現存しない異本を基に、そのまちがった形のままで復元された可能性がありま

す。

ともかく、院が出家をしたことと、「殿下乗合」の事件とは生成過程の中に同じ日付になったようです。その後のすべての改作者には、二つの整理の可能性が残されました。一つの日付を脱落すること、あるいは二つの日付間の矛盾を自分なりに整理する事でした。（例えば、両方の日付が七月十六日となっていて、前の日付が六月十七日に訂正された可能性はあります。）最後に、乗合事件の日付を、それに対する報復事件（十月二十一日）に近づける為に、乗合の日付を七月十六日から十月十六日に直してきたようです。

つまり、今の当道系では、一院出家の項目は必ずしも新しく挿入したものではなく、どこか昔の層から、すでに誤っていた七月十六日の日付を採ってきたのかも知れません。

続いて、「殿下乗合」事件の位置付けです。事件の内容は、資盛が一定の（異本によって異なる）場所で摂政基房と乗りあって、恥辱を与えられたということです。このことは、直接の史料である玉葉からも、後、愚管抄、百鍊抄からも知る事が出来ます。まず、この事件が起こった場所について調べてみましょう。「玉葉」ではこの点は不明で、その時、基房が法勝寺に向かっていたというような

事だけが読み取れるのです。法勝寺に向かっていたのなら、東洞院の宿舎を発ってから、二条京極を通過したことになります。十六日、法性寺に向かっていたとなっていますが、事実ならば、基房は二条京極を通過したはずはありません。この点について、村井康彦先生の御卓見を賜りましたが、先生は、この点も間違いで、基房が今度も、前と同じく法勝寺に向かっていたと見ておられます。すなわち、基房は、七月三日も十六日も、法勝寺に向かう途中、二条京極を通過する時点で、なんらかの事件にまきこまれた、あるいは少なくとも巻き込まれる恐れがあったという可能性が十分考えられます。三日、乗合の日、資盛はどこから来ていたのでしょいか。四部本は、内野の遊びから帰っていたことにしていますが、これが果たして最古態でしょうか。

この点について、源平闘諍録の文章が興味を引きます。本は、資盛が「女車」に乗っていたという箇所を馬乗りに変えているのですが、これは、渥美かをる氏が早くから指摘されたように、「女車」が平家の武將の姿を登場させるのに相応しくない記述であるからでしょう。一方、鷹狩りから帰っている資盛の騎馬の姿は、源平闘諍録の成立環境にふさわしく、男らしい場面でしょう。資盛の齢までも状況設定に合わせた形になっており、三年ほどつり上げてあります。

改作の文学的な価値は得られた訳ですが、この改作を撰んだ改作者は、改作の「代償を払」わなければなりませんでした。

まず源平闘諍録では、センテンスの自然な長さは文章の改作によって損なわれ、次の数段階に及んで、センテンス当たりの平均の最単文数（筆者推進の、文章構成上に効的な長さの指数）が崩れ、センテンスの長さは不安定に変動するようになりました。この改作の形跡は今も残っており、また、この改作が源平闘諍録で初めて起こったことも証明できます。

源平闘諍録は千葉氏の周辺で書かれたものとされています。京をよく知らない読者を対象にしていますから、寺の名称、二条京極のような場面設定が改作者の意識になかったようです。改作者は場所の設定を単純化して、最初の事件（乗合事件）の設定を報復の事件から借りる形にしています。また、基房参内のテーマも報復事件から「借り出され」、乗合背景の説明のために再度に利用されました。つまり、基房が元服の定めのために参内していたということになっていますが、これでは参内のいきさつは、二個の事件の設定となり、反復されます。同じ元服の定めのために、三ヶ月の期間を挟んで二回も参内する話しが不自然であることはいままでもないことですが、源平闘諍録の改作者はこの点ではずいぶん大ざっ

ばな構想を選択しました。さらに、事件を参内途中として位置づけながら、二条京極で起こったこととするのではまずくなります。蓮台野から帰ってきた資盛が大宮京極で摂政関白に会ったとして書いてありますが、実はこれも、京都に詳しい改作者には納得しにくい点です。これは後の異本ではここは当然、訂正されました。例えば、延慶本は四部本に従い、六角京極説を受けとめています。勿論、六角京極は二条京極には大変近く、また盛衰記の中の三条京極と殆ど変わりません。しかし、延慶本は資盛の騎馬の経緯では、源平闘争録に依っています。つまり、資盛が馬に乗って帰っていた、馬から下りなかったから引きずり落とされたということ。事件が二条京極で起こった点は四部本に依拠していると思いますが、後期、源平闘争録の文章との合流の形跡も窺えます。四部本が先行していたことの示唆は、重盛がこの事件を評価している発言の中に残っています。四部本では重盛は「降りざるこそ尾籠なれ」と言っています。しかし、源平闘争録の文章では「馬より降りざるこそ尾籠なれ」となっており、延慶本は「車よりも馬よりも降りざるこそ尾籠なれ」となっています。二種類の文脈——「馬より降りざるこそ尾籠なれ」と「車より降りざるこそ尾籠なれ」——は延慶本系統の中では合流しました。今の四部本では、「車より降りざるこそ尾籠なれ」ではなく、

ただ「降りざるこそ尾籠なれ」となっているのは、合流の直接の源となった所と
だいぶ違います。

「車より降りざるこそ尾籠なれ」というのは、現四部本の源泉——四部本1系
統を増補した四部2系統——の段階に出来たと思います。また、四部2系統段階
のセンテンス「車より降りざるこそ尾籠なれ」は、盛衰記の重盛の発言の中に保
存され、四部2系統がそうになっていたことを裏づけています。

覚一本によると、乗合の後、「資盛朝臣法王六波羅に御して、祖父の相國禪門
にこの由訴え申されければ、入道大いに怒（っ）」たそうです。

一方、盛衰記の「秘本曰く」として導入された説明によると、この事件を起こ
したのは清盛ではなく、重盛であり、また清盛はその時福原にいて、福原で寺の
行事に参加していたということにしています。これは歴史的資料からも裏付けら
れる主張で、史実でありましょう。「玉葉」からも分かるように、事件の責任者
は重盛であって、「愚管抄」も、重盛が一つだけ「不思議」な事を起こしたのは、
この報復の事件だったと述べます。

すなわち、資盛は本当は清盛のところに行ったのではなく、どこへ行ったかと
いうと、父重盛の小松殿に帰ったのでしょう。これによってやはり四部本を古態

の異本系統と見ることにあります。重盛の反応の方が清盛の反応に先だっています。興味深い点は、重盛が次男の体験について、「恥にあらず」としているところです。なぜなら、「玉葉」でも書いてあるように、――そして『平家物語』もその言葉を取っていますが――資盛は大変な恥辱を与えられたわけです。恥辱を与えられたということは、文脈から判断すれば、殴られたという意味でしょう。これは、後出の「恥にあらず」という表現と随分矛盾します。そこで、現存の四部合戦状本は、「頗る恥辱を与へけり」というような文章ではなく、ただ「散々に追い散らし」という形に変えています。続いて、源平闘諍録の成立過程中に、このように変えた文章と、それ以前の、「玉葉」に基づいた文章は既に共存し、また現存の源平闘争録は両方を合流させています。恐らく、「盛衰記」が部分的に残している四部2の文章はもう「散々に追い散らし」したような形になっていて、「盛衰記」の叙述もこれに近いのです。一方、「すこぶる恥辱を与」えたというような、古態的文章は四部1の特徴で、源平闘争録に直接に伝わったと思います。

重盛と清盛の反応の順番について。重盛の反応が清盛より先に出ているのは、これは、既に指摘いたしましたように、四部本の文章であって、古態的な要素で

しょう。次に、清盛は報復を命令しました。盛衰記によると、特に悪い奴を選んで、彼らに命令したのです。例えば難波・経遠などに、命令したということになります。この文章を展開させるのは延慶本で、通定の伝説が挿入されます。こういうふうに、文章は少しずつ変わっていきます。

報復事件には三つの形があります。ひとつは、武士が基房を待っている場面から始まります。次に、基房の参内への御出が描かれ、最後に武士が基房を攻めます。これと異なる順序は、まず基房が帰っているという場面が紹介され、後で武士が待ち受けて攻めるのです。並べ方の相違は、各異本が焦点をどこに置いているかによるものだと思います。基房に焦点をおいた古態的な本は、乗合の事件でも、報復の事件でも、基房のいきさつを先に持ってきます。しかし、このような、歴史的記録になかった順序をひっくり返し、平家に焦点を当てると、平家の主題を先に持つてくることになります。つまり、先に資盛が帰っていて、続いて、基房が参内し、彼に出会った、それから清盛の命令で武士が待っていて、そこに基房の行進が出てきて、襲われるのです。

ところが、延慶本では、最初に武士が待っている、次に基房のお出ましが書かれる、その後、繰り返しになりますが、また武士が待っていて、やっと基房を襲

う、というような反復性のある構造です。これもまた、延慶本の重層性の現れです。この重層性はそれ以降の諸本でも長く相伝されており、延慶一以降成立の一基準と見る事が出来ます。しかし、覚一本に近い本になると、反復は整理さたようです。覚一本ではこの箇所では繰り返しは見あたりません。

報復の事件では、「玉葉」にも書いてあるように、隨身と前駆が襲われて、何人かが髻を切られたのです。「玉葉」によると、前駆は五人で、通定（道偵、ミチサダ）一人が助かって、残りの四人は髻を切られました。しかし、四部本では、私はこれを古態と見たいのですが、前駆六人が髻を切られ、隨身十人が襲われた、あるいは髻を切られたということになっています。摂政の隨身は普通七〜十人、前駆は五〜六人ですが、「玉葉」によると、当日は五人でした。平家物語の古態的異本の中の、前駆六（ゼンクロク）、随人十人（ズイジンジュニン？）という表現は、覚え安い発音を記憶術としていたのではないのでしょうか。と同時に、「模型」化した数字を模範文型に入植しています。このような「モテクニツク（記憶法）」は、「平家物語」がこの段階にいたって既に語り物であったことを示しています。

延慶本では、十九人まで髻を切られたということになっています。この奇妙な

数字は何を根拠にしているでしょうか。源平闘諍録を見れば、隨身十人のところは「隨身人」で、数字「十」が没落してあります。前駆六人の数字「六」も、特に語りの中では、脱落したことが十分考えられます。そこで前駆のことがだんだん分からなくなり、何回も語り直されるうちに、「ゼンクニン、ゼウクニン？」は「十九人」になったようです。語り、あるいは「読み本」の朗読が機械的に行われたことの例でしょう。その裏付けは、この時点から殆どの異本から「前駆」が消えてしまったことです。覚一本もこの箇所を整理しないで、前駆には触れていません。この箇所は延慶2の中では「ミチサダ」説話の挿入によって一度内的整合性を失い、センテンスの順序がひっくりかえされました。そのため、以降の殆どの異本では、「その中」という表現は、今度は前駆のことではなく、隨身のことを示すことになりました。

次に、基房は恥辱にあつて、「車から崩れ給けり」という所にご注目いただきたいと思います。このあたりは、本によつては、「小屋に入れられけり」など、いろいろと細かく書いてありますが、この主題も、源平盛衰記を見ると、元々は資盛の被害のことであります。資盛が車から落とされた時、人が車を小屋に入れたという話があります。人が「車から落とされた」ということは、ある重要

な事件に対するただの補助的エピソードですが、このように、重要な事件の内容が変わった時、補助的エピソードは全く違った事件の叙述に採用されました。

報復事件の記述は、資盛に対する攻撃事件の要素を取り入れています。そこではまた、ある段階から、主に当道系の方法ですが、基房が大変な目にあって、御供の奉行は皆「蜘蛛」のように散ったという話を途中で断って、基房の哀れな還御の前に先ず、こんなに乱暴していた武士達が六波羅に帰って清盛に報告した後、清盛は「感御あり」としているのです。

清盛のこの、報復に対する嬉々とした反応も、初期の「平家物語」には無かったでしょう。また、重盛が嘆いていたという話もなかった可能性について、「平家」の研究ではたびたび指摘されています。

しかし、私は、四部合戦状にもあるように、重盛がこの事件のために大変嘆いていたという話は、重盛が乗合の事件を最初に聴いたことと内的には照応すると思います。また、嘆きの指摘は「玉葉」における乗合事件に対する重盛の不和感の記録から直接に生まれたかも知れません。

この嘆きは、「平家悪行の始め」としての評価とともに、章段「殿下乗合」両事件の「梓付け」であると思います。すなわち、この梓付けを担うのは、章段冒

頭部分の中の「院・・・安からず思し召されけるに・・・」のような表現、「平家悪行の始めなり」のような纏めと、重盛が嘆いていたという叫喚的な引用文でしょう。これらは皆明らかに、作品のかなり原始的な統合性文体層に所属しています。しかし、重盛の反応の経緯や「悪行の始め」という経緯は、章段の冒頭部分や物語の序章などに見られる、達成した語りの文体層とは異なって、流動期に成長しつづけた独自の、未達成の文体層であって、先にも述べましたように、統合性文体層の一定の編修の結果でしょう。この文体層はその後にも不安定でありつづけます。例えば、未完結揚題句「世のみだれける始め（「根本」、「根元」とも）」と、還御儀式への嫌がらせの先例なさを訴える表現が導入されたこともあり、また、屋代本、「盛衰記」のように、改作にともない、「悪行の始め」としての把握が脱落されたこともあります。作品におけるこの事件の把握は根本的には変わりません。

清盛が喜んでいる場面は、延慶本・源平闘争録にもありますが、次のようになっています。まず重盛が嘆いていたこと。清盛が先に喜んでいたのか、重盛があとで嘆いていたのか、これも本によって違います。

また、お配りしたプリントの中の表示をご覧下さい。見ますと、源平闘争録の

時点から、当道系以外の本では、清盛親子の反応はセグメント②②「平家悪行の始まり」の前にもってこられました。しかし、これが古態的な文章と違うことがすぐに分かります。なぜなら、この順序になると、重盛が嘆いていたことまでも「平家悪行」として解釈されてしまって、大変奇妙な構想になります。これは一種の文章整理中の不注意」で起こったことでしょう。これを当道系は再度整理して、平家悪行に含まれない事を、②②の「悪行の始め」の後に戻します。今度はセグメント②②に次いで、かなりの増補があつて、セグメント②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿は細かく重盛の行動を美化し、誉めたたえています。悪人にふさわしい反応——清盛の喜び——はセグメント①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿に残され、セグメント①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿「平家悪行の始めなり」——の先に載っているのです。

冒頭部分に付加された梓づけの未完結揚題句「世の乱れそめける根本」の成立問題について。それを作ったのは恐らく延慶本①でしょう。古い諸本における、重盛の発言の中の表現「これ世の乱れと成らん」を踏まえていると思われませんが、揚題句はセグメント①②に先行しました。西田氏の詳細な研究がありますが、このような揚題句が、初期の平家物語にも沢山あったのでしょうか。

例えばこの場合、セグメント①②——世の乱れそめける根本は——これは名詞

句として「何々なり」という風に切れるはずなのに、セグメント「 \rightarrow から $\rightarrow\infty$ を経て、セグメント ∞ のまで一つの切れ目のない、長い、不整合なセンテンスとして続いており、助動詞「なり」では結ばれず、未完結のまま文末と成ります。しかし、この奇妙な形態も結局粹付けへの志向、つまり明白な粹付けのある語物へ改作の結果です。当道系は、揚題句の基礎となった表現を重盛の発言から取消して、文章内の反復を旨く処理しました。

「世の乱れそめける根本」と「平家悪行の始め」は両方とも同じ狙いの表現です。屋代本で見られるように、片一方の表現のなかで使われた語彙「始め」は、もう一つの表現の中でも採用されていた、意味的機能の照応と平行して、語彙選択の照応も観察されます。

見ますと、文章の語りなおしにもはっきりしたルールがあって、改作作業はこのルールを踏まえなければなりません。一方、これらのルールは、文章の古態、現態などへの手がかりにもなります。付録の中ではこれらのルールの例を掲げておきます。

以上、章段「殿下乗合」にテキスト言語学的分析を応用してみても、章段の構想・生成過程などを考え直してみました。ここで紹介した私の分析法は、複雑に変動

してきた作品の構成の解明をめざしている方法として、各国語の素材、例えば旧約聖書と類似した内容をもった古文書の整理にも応用できると思われます。

以上はまことに大変初心的な考察ではありますが、御批評を仰ぎたくどうかよろしくお願い申し上げます。

最後に、作品成立に関する私の心の中の根本的な仮説を纏めて、もう一度述べさせていただきたいと思います。「平家物語」生成のかなり早い段階では、序章と同じ文体層に所属していた語りの要素はこの物語を統合させ、平家が清盛の悪行のために滅亡したという解釈を加えたことによって、「平家物語」は作品として、現存の異本共通の主旨を得たのです。生成期成立の、かなり古態的な異本系統は四部1系統であって、その実態は現存の四部本では部分的に保存されました。流動期にいたって、四部1、四部2などのように、複数の異本系統が平行して存続し、個々の要素の合流の状態によって各系統の成立を解明することができません。適切な方法は、最単文配列の比較対照と、伝達機能を基に分けた、それぞれの部類におけるエピソード配列の比較対照であります。

御静聴どうもありがとうございました。

付録1・被検文章(数字、符号付の数字はセの切れ目、下線は最短文の切れ目を示す)
さるほどに1、嘉応元年七月十六日2、一院御出家あり3。御出家の後も3' 万機の政をき
こしめされしあひだ4、院内わく方なし5。院中にちかくめしつかはるる公卿殿上人、
上下の北面にいたるまで6、官位俸禄皆身にあまる斗なり7。されども8 人の心のならひ
なれば8'、猶あきだらで9、「あっぱれ、其人のほろびたらば其国はあきなむ。其人うせ
たらば其官にはなりなむ」10 なんと10'、うとからぬどちはよりあひよりあひささやき
あへり11。法皇も内々仰なりけるは12、「昔より代々の朝敵をたいらぐる者おほしといへ
ども、いまだ加藤の事なし。貞盛・秀郷が将門をうち、頼義が貞任・宗任をほろぼし、義
家が武衛・家衡をせめたりしも、勳賞おこなはれし事、受領にはすぎざりき。清盛がかく
心のままにふるまうこそしかるべからね。是も世末になって王法のつきぬる故なり。」と
仰なりけれども13、ついでなければ御いしめなし13'。平家も又別して14、朝家を恨奉
る事もなかりしほどに15、世のみだれそめける根本は16、去じ嘉応二年十月十六日17、小
松殿の次男新三位中将資盛卿17'、其時はいまだ越前守として18 十三になられけるが18'、
雪ははだれにふったりけり19、枯野のけしき誠に面白かりければ20、わかき侍ども三十騎
斗めし具して21、蓮台野や紫野、右近馬場にうち出て22、鷹どもあまたすへさせ23、鶺鴒・
雲雀をおったておったて24、終日かり暮し25、薄暮に及て 25' 六波羅へこそ帰られけれ
26。其時の御摂祿は松殿にてましましけるが27、中御門東洞院の御所より御参内ありけり
28。郁芳門より入御あるべきにて29、東洞院を南へ30、大炊御門を西へ御出なる31。資盛
朝臣大炊御門猪熊にて32、殿下の御出にはなづきにまいりあふ33。御ともの人々34 「な
にぞぞ、狼籍なり。御出のなるに、のりものよりおり候へ..」といらってけれども35(資
盛)余りにほこりいさみ36、世を世ともせざりけるうへ37、めし具したる侍ども、皆二十
より内のわか者どもなり39。礼儀骨法弁へたる者一人もなし40。殿下の御出ともいはず41、
一切下馬の礼儀にも及ばず42、かけやぶってとほらむとする間43、くらはしめし44、つや
つや入道の孫とも知らず45、又少々は知たれども、45' そらしらずして46、資盛朝臣をはじ
めとして47、侍ども皆馬よりとって引おとし48、頗る恥辱に及けり49。資盛朝臣はうはう
六波羅へおはして50、おほちの相国禪門に此由うったへ申されければ51、入道大にいカッ
て52、「たとひ殿下なりとも、浄海があたりをばはばかり給へきに、おさなき者に左右な
く恥辱をあたへられけるこそ遺恨の次第なれ。かかる事よりして、人にはあざむかるる
ぞ。此事おもひしらせたてまつらでは、えこそあるまじけれ。殿下を恨奉らばや」とのた
まへば50、重盛卿申されけるは61、「是はすこしもくるしう候まじ。頼政・光基など申

源氏どもにあざむかれて候はんは、誠に一門の恥辱でも候べし。重盛が子どもとて候はんずる者の、殿の御出にまいり逢て、のりものよりおり候はぬこそ尾籠に候へ」とて62、其時事にあふたる侍どもめしよせ63。「自今以後も、汝等能々心うべし。あやまって殿下へ無礼の由を申さばやとこそ思へ」とて64 帰られけり65。其後入道相国66、小松殿には仰られもあはせず67、片田舎の侍どもの68、こはらかにて入道殿の仰より外は69、又おそろしき事なし70、と思ふ者ども71、南波・瀬尾をはじめとして72、都合六十余人召よせ73、「来二十一日、主上後元服のさだめの為に、殿下御出あるべかむなり。いづくにても待つけり、前駆御隨身どもがもとどりきって、資盛が恥すすげ」74 とぞのたまひける75。殿下是を夢にもしろしめさず76、主上明年御元服77、御加冠拝官の御さだめの為に、御直廬に暫く御座あるべきにて79、常の御出よりもひきつくろはせ給ひ80、今度は待賢門より入御あるべきにて81、中御門を西へ御出なる82。猪熊堀河のへんに83、六波羅の兵ども84 ひた甲三百余騎 85 待つけり85、殿下をなかにとり籠まいらせて86、前後より一度に87 時をどつとぞつくりける88。前駆御隨身どもがけふをはれとしようぞひたるを89、あそこに追ひかけここに追つめ90、馬よりとって引おとし91、さむざむに陵轢して92、一々にもとどりをきる93。隨身十人がうち94、右の府生武基がもとどりもきられにけり95。其中に96、藤原威人大夫隆教がもとどりをきるとて97、「是は汝がもとどりとと思ふべからず。主のもとどりとと思ふべし」といひふくめてきてンげり99。其後は100、御車の内へも弓のはずつきいれなとして101、麗かなぐりおとし102、御牛の楯・胸懸きはなち103、かく散々にしちらして104、悦の時をつくり105 六波羅へこそまいりけれ106。入道「神妙なり」とぞのたまひける107。御車ぞひには108、因幡のさい使109、鳥羽の国久丸と云おのこ110、下筋なれどもなさけある者に111、泣々御車つかまて112 中御門の御所へ還御なし奉る113。束帯の御袖にて御なみだををさへつつ114、還御の114'儀式のあましまし115、申も中々おろかなり116。大織冠・淡海公の御事はあげて申に及ず117、忠仁公より以降119、摂政関白のかかる御目にあはせ給ふ事120、いまだ承及ず121。是こそ平家の悪行のはじめなれ122。小松殿こそ大にさはがれけれ123。ゆきむかひたる侍ども124 皆勘当せらる125。「たとひ入道いかなるふし譴を下知し給ふとも、など重盛に夢をばみせざりけるぞ。凡は資盛奇怪なり。柙檻は二葉よりかうばしとこそみえたれ。既に十二三にならむずる者が、今は礼儀を存知してこそふるまうべきに、か様に尾籠を現じて入道の悪名をたつ。不孝のいたり、汝独りにあり」とて126、暫くいせの国にをっくださる127。されば此大將をば128、君も臣も御感ありけるとぞきこえし129。

表2 a・部類 事件、「小事件」、「小事件部」の表

A・事件叙述の部類（一般）

- Aa 高倉天皇御即位（先行章段）
1. Aa' 院御出家（1～3）
 - Ab 乗合事件-時間的設定（17）
 2. Ab1 摂政関白基房は京を通る（27～31）
 - Ab2 平資盛は遊びから帰る（21～26）
 3. Ab3 関白と資盛は乗り合い、挨拶しなかった資盛は制裁される（32～49）
 - Ab4 関白は奉行を課める
 - Ac 報復事件-時間的設定（Bcに含まれる）
 6. Ac1 関白は、何も知らず、再び京を通る（76～82）
 - Ac2 清盛の侍は関白を待っている（83～85）
 7. Ac3 清盛の侍は関白の御供を攻め、もとどりを切る（86～99）
 - (7.)Ac4 清盛の侍は関白の車を襲う（100～104）
 8. Ac5 清盛の侍は六波羅へ帰る（105～106）
 - Ac6 関白は行方不明になり、賤民の家で見つかる
 - Ac7 関白の還御に御供が一人だけ仕る（108～113）
 9. Ac8 重盛は資盛と奉行を課め、事件を奉行の所為にする（Beを含む）
 - Ac8' 重盛は資盛と奉行を課め、事件を資盛の所為にする（124～9）（Beを含む）
 - Ac9 西八条にもとどりのこしらえものがある
 - Ac10 元服が延ばされる
 - Ac11 御供が一人かつらを結んで、院参（、そして出家）する
 - Ac12 関白は院参

B・事件叙述の部類（表現内的行為）・一部

4. Ba 重盛はAaを伝え聞き、次に清盛が伝え聞く
- Ba' 資盛はAaを重盛、そして次に清盛に伝える
- Ba'' 資盛はAaを清盛に直接に訴える（50～51）
5. Bb 重盛は大騒ぎを鎮め、侍に警告（61～65）（Ceを含む）
- Bc 清盛は報復を命じる（52～60、66～75）（Cfを含む）
- 9. Bd 清盛は関白院参を伝え聞いて、批判

- Be 重盛は奉行、あるいは資盛を批判する〔Ac8, Ac8' に含まれる〕
- C・評価・信念の部類の一断編(部類A,B に依存)
- Ca 院近くの公卿は、平家が国・荘園を奪い取っている事に不満(10～11)
- Cb 院も平家に不満(12～13)
- Cc 重盛の判断: 報復すれば世の中が乱れる〔Cbに含まれる〕
- Cd 報復事件Acは摂政関白に対し、前例のない恥辱(盛、源、延、長、南) / 恥辱の始め(屋、松)である(114～121)
- Cd' 平家悪行の始めである(122)
- Ce 重盛の判断: 報復してはならない〔->Cbに含まれる〕
- Ce' 重盛は(報復を)嘆く(123)
- Cf 清盛の判断: 資盛の恥をすすぐべし〔Ccに含まれる〕
- Cf' 清盛の判断: 資盛の恥をすすいでよかった(107)
- Cg 重盛の判断: 資盛は事件の責任者である〔Cb, Be に含まれる〕...
- D. 解説、その他(場面設定、総め、背景、接続...)の部類の一断編(部類A,B に依存)
- Da/Da' Aa(Aa')後、院(法皇)は万事を行う(3'～5の状況設定としての面)
- Db 院の殿上人も呆れている(5'～7)
- Dc 殿上人はまだ飽きない(8～9)
- Dd Cbの為、Aa'(CbはAa')の原因である
- Dd' Aa'にもかかわらず、Da'、Ca(3'～5の接続としての面)
- De Cbが行動に移らないまま、Ab, Acが起こる(14, 15)
- Df Deが世の乱れの元(盛: 運の傾くべき節)となる(16)
- Dg 資盛はAaの時、越前の守で、大変若い(17'～18)...
- 解説: ここに掲げた「小事件群」は、(7')を除いては、旧本に共通の「小事件群」のみであり、各旧本に共通のあらすじとなっている。A., B.....は部類、Aa, Ab, ..., は「事件」、Ab1, Ab2...は「小事件」、1., 2.は「小事件群」である。拙論では、部類D.の始めだけを扱った(Cb 雪がほだれに降っていた(19), Di 枯れ野の風景は美しかった(20)、と続く)。下線は寛一本の「小事件」を示す。括弧で囲まれた数字は、寛のセの番号で、四角括弧で囲まれた注も寛についてである。((7'))は、寛独自の「小事件群」である。「-9.」は「小事件群9.」の一部を示す。

付録2. 最短文配列対照表の説明と応用

最短文配列対照表の一例を挙げよう。

盛 "16" 17 x 27 "28" { . ' 32' . } 34 35 | 42' 43 | 35/102 { . 49' } 101"/111" { 17' /18' "22" }
26/33

四	17	17'	18'	21	22/26'	27	28	32	33												
源	17	27	28	17'	18'	22	23	24	25	19'	20'	25'	26'	"32"	33						
延	16	17	17'	18	22	23'	21	23	24	25	19'	20'	25'	26'	27	28	32	33			
長	16	17	17'	18	22	23'	21	23	24	19'	20'	25	25'	26	27	28'	28'	32	33		
南	17	17'	18'	18	"21"	22	"23"	19'	20'	24	25	25'	26	32	27	28	33				
屋	16	17	17'	18	18'	19'	20'	21	22	23	24	25	25'	26	27	28	29	30	31	32	33
寛	16	17	17'	18	18'	19	20	21	22	23	24	25	25'	26	27	28	29	30	31	32	33

表の各行は、それぞれの本におけるセグメントの配列を示している。寛の文章は次の通りである(常用漢字により表記、セの番号は便宜上セの頭に付加した)：

寛 16世のみだれをめける根本は、17去じ嘉応二年十月十六日、17' 小松殿の次男新三位中将資盛卿、18其時はいまだ越前守とて 18' 十三になられけるが、19雪ははだれにふったりけり、20枯野のけしき誠におもしろかりければ、21わかき侍ども三十騎斗かりめし具して、22運台野や紫野、右近馬場にうち出て、23鷹どもあまたすへさせ、24鴉、雲雀をおったておったて、25終日かり暮らし、25' 薄暮に及て 26六波羅へこそ帰られけれ。27其時の御摂祿は松殿にてましましけるが、28郁芳門より入御あるべきにて、30東洞院を南へ、31大炊御門を西へ御出なる。32資盛朝臣、大炊御門猪熊にて、33殿下の御出にはなづきにまいりあふ。

寛以外の本については、主な異同のみに注目した。

盛 "16" 其時然べき運の傾く符にや、17同二年七月三日、x法勝寺へ御幸ありければ、27当時の摂祿基房公(小字)号松殿 "28" 参給けり。'32' 遷御の後殿下三条京極を過給けるに、x 三条面に女房の車あり。... 34 居飼御殿舎人等、35車より下るべき由責けるに、42' 聞入ずして、43やり過んとしけるを、102狼藉也とて前の簾、並に下すだれを切落たりけるに、x... x... 49' 追果て散々に打けり。101"/111" 東京極の小屋にやり入にけり。17' /13 件の男は太政入道の孫、越前の守資盛也けり。"22" ... 笛を習はんとて、..

雅盛が家に行たりけるが、26/33 帰ける間参会にけり。

四 18其頃越前守御(小字)生年十一才 21 相具若侍十四五人 22/26' 自内野遊返時
27構臣... 松殿 28 御所従法住寺殿中御門東洞院宿所成還御。32 六角京極 33資盛参
合。

源 23為小廩守 19降 20枯野景気憐之間 '25' 及夕 '26' 下大宮大路還。"32" 大炊御門
大宮

延 16代の乱れける根元は、17' 小松内大臣重盛... 二男 23' はひたかあまたすへさせ
て 25' 夕日山の端に傾て 26' 京極を下りに被帰けり。

長 16世の乱れそめける根元は 20.. 景色.. 25' 日山の端にかかりければ 26' 帰られける
に、"28" 院の御所法住寺殿へ参らせ給ひて、28' 還御有けるに、.. 33 参合う。

南 '17' 嘉応元年... "21" .. 二三騎.. "23" 小廩ノ遊覧トゾ聞ヘシ '19' 折シモ薄雪降タ
リ..

屋 '16' 世の乱れ初ける始は..

表中の厚線は、最短文の切れ目を示し、対応するセを結ぶ(下線あるいは
「"..."」, 「'...'」で示された微妙な意味的なずれを無視した)。矢印「<」は、文
頭に向かって移動してきた最短文を示す。最短文配列対照表を基に、ほぼ次の最
短文の切れ目の分布表が得られる。

盛	"16"	17-x	"28"	17' / 18	"22"	' 26'.	26/33。
四				18	<u>21-22/26'</u>	<u>28</u>	<u>33.</u>
源		' 28'	18 18'	22	<u>23</u> 25。	' 26'。	33.
延			18	22 23' 21-23	25。	19 20 ' 26'。	28 33.
長			18	22 23' 21-23		19 20 26 28	33.
南			18	22	<u>"23"</u>	19 20 26 28	33.
屋				18' 19 20 22	25。	26 28, 31.	33.
寛				18' 19 20 22	25	26。28 31.	33.

最短文の切れ目をなさないセは、最短文の認識に必要な場合のみ示した(17-, 21-)。

次の表では、全章段「殿下乗合」の中の一部の最短文を選び、それらの各旧本間におけ
る位置の異同について表した:

推定生成過程の一例

- 1) 44b 45b 45' 34 35
 2) (44b) 34' 45b 45' 43 35 34"
 3) 44a 45a. (45') 34 35 43 44b 34' 45b (45')
 4.1) 35' 42 43 44b 34 45b 45'
 4.2) 34' 35 42 43 44b 34 45b

各段階の部分的保存:

1=四 2=源 3=長 4.1=屋 4.2=盛、延2、南、光

2の生成: 3 4⁽¹⁾の左助、3 4⁽¹⁾の繰り返し、4 3を挿入

3の生成過程: 4 3の左助、1と2の合流

4・1の生成過程: 3の中の重複の整理、4 2の挿入

4・2の生成過程: 3の中の4 4、4 5の重複の整理、4 2の挿入、4 5'の削除

1・暗程—不知大政入道孫—只人無礼思—御友者共—何白者云

2・然間—前驅御隨身等—不知消盛入道孫—思只打任人野狼籍・・・御隨身

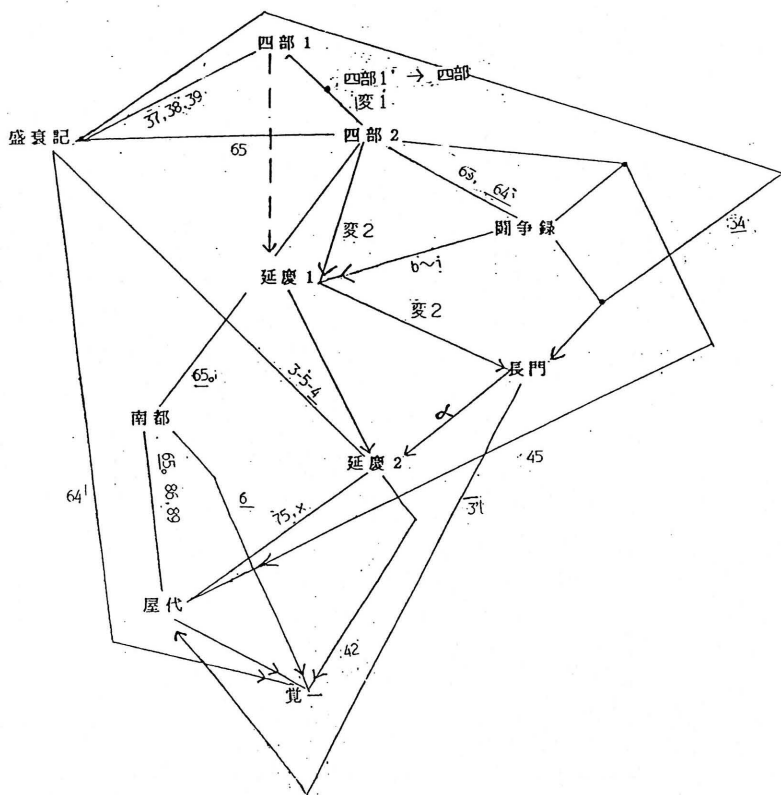
3・夜にてありければ—殿下の御出とも知らず—これによりて(依之)前驅の御隨身—しきりにこれをいらつ—「何者ぞ。御出なるに・・・」暗きほどにてありければ(にてはあり)—御共の人々つやつや入道の孫とも知らず

・・・

4・1「何者ぞ。・・・」—・・・くらさはくらし、御供の人々—つやつや・・・

4・2 前驅御隨身—しきりにこれをいらつ—「洛中にて、馬にのるもの・・・」—くらさはくらし—御供の人々も—つやつや・・・

図2. 「殿下乗合」を基にした諸本の相関



注 図では系統間の共通点と変換関係も示されるが、詳しい説明を省略する。「一 →」、「四部1' → 四部」を加えることによって、平田俊春(1991)「平家物語の批判的研究」(国文学刊行会)の諸本相關に関するデータもほぼ説明できる。(平田氏の「原形」はこの「四部1」のような性質のものと見るべきであろう。)

注：図面には、国文学資料館で開かれた「日本文学研究集会」（第14回、平成2年11月16～17日）で発表させていただいたものが含まれている。

*****発表を終えて*****

平家物語は、世界文学の中でも希に見る、複雑な過程を経て成立したもので、まさに流動文学の傑作と云える。諸本の本文の流動や変化にこそこの作品が存在するとまで言われている。一定の方式の語りを楽しむことは、元々その場限りの体験であったかも知れないが、多岐にわたる階層の著者・編者の存在や何度も繰り返された改作作業から、「平家物語」の逞しい生命力が実感される。

テキスト言語学法は確かに、作品の長い生命に光を当てて一方法にすぎない。しかし、この方法で作品の成立状況をかいま見る事ができれば、幸いに思う次第である。

K. Heide

日文研フォーラム開催一覧

回	年 月 日	発 表 者 ・ テ ー マ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORI ß EN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊びー拳を中心にー」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像ー現実と幻想ー」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性ー恵信尼の書簡ー」
⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」

⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オペリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6. 13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7. 11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
14	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
15	元. 9. 12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑭	元. 10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
17	元. 11. 14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」
⑮	元. 12. 12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」

19	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ（インディアナ大学準教授） Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
20	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー（筑波大学哲学思想学系外国人教師） Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
21	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン（カンザス大学教授・日文研客員教授） Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士 －戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ（スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授） Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ（ミネソタ州立大学助教授） Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
②④	2. 7.10 (1990)	李 国棟（北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師） LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇 －文化伝統からの一考察－」
25	2. 9.11 (1990)	馬 興国（遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授） MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
26	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト（リハイ大学助教授） Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールス王伝説に おける主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日研 客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデ ミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情 ー古典から近代までー」
30	3. 3. 5 (1991)	ウィーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研 究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 ーゲオルグ・マイステルの旅ー」
31	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノビッチ (ワルシャワ大学教授・ 日研客員教授) Mikolaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・ 日研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都ーケンペルの上洛記録」
33	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルルール・ネール大 学教授・日研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日研 客員教授) Jurgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

非売品

発行日 1991年10月15日

編集発行 国際日本文化研究センター

京都市西京区御陵大枝山町3-2

電話 (075) 335-2048

問合先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

©1991 国際日本文化研究センター

■ 日時

1991年1月8日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

